

## 論文「人類の共存と宗教の役割」

塩尻 和子

### 1、平和を作り出す共同体とは何か？

もう17年前の事になるが、2007年9月に発表されたイギリスの国際戦略研究所の報告書は、温暖化、気候変動、世界人口の増加、自然資源の枯渇といった、気候危機と人類の将来に関する困難な問題を前にして、人類社会が混乱と衝突と戦争の時代を迎えてしまう可能性について述べていた。それからの年月、今日まで、確かに気候危機は顕著になってきている。しかし、このような地球規模の深刻な問題を前にして、持続可能な平和な世界を残すために、人類は何か決定的な施策に取り組んできているだろうか？例えば脱二酸化炭素の排出制限でさえも、なかなか実行されない。

政治や経済の側面からこの問題に対処することが難しいのなら、歴史を生き延びてきた宗教に何かできることはないのか？

確かに宗教も、同じ神を奉じる「アブラハムの宗教」、つまりユダヤ教、キリスト教、イスラームの信者数は世界人口のほぼ六割を占めるが、これらの宗教が過去から現在にいたるまでの相克と対立を乗り越えて、まずこの二一世紀を血と涙の世紀としないために、手を携えて「平和を作り出す」ことが切実に求められている。そのために、これらの宗教の教えと歴史を振り返って、どのように諸宗教がサステナブルな平和を作り上げるのに貢献できるかを考えてみたい。歴史を生き延びてきた宗教が担う役割は、実際に大きいからである。

世界宗教と呼ばれる宗教には、それぞれの基本的な教義として、人間精神の平安、つまり「魂の救済」が掲げられている。仏教においては、それは現世的な事物に執着しない「無」や「空」の教えであり、キリスト教では「汝の敵を愛せよ」という究極の隣人愛として教えられる。「無」や「空」の思想も「隣人愛」の教えも、現実の人間社会で実現することは不可能な教えであり、まさに「宗教的理

想」である。しかし、宗教においては、理想が高尚であればあるほど、その宗教がこの世に「平和」を導くものとして評価される。

これまでも繰り返してきたことであるが、これらの宗教が理想としてもつ正義や愛の教義は、たんに暴力を排除したり避けたりするだけでなく、むしろ積極的に「平和を作り出す」ことの必要性を教えている。ユダヤ教、キリスト教、イスラームのセム的三宗教のなかで代表的な教えは、イエスの「山上の垂訓」であろう。マタイによる福音書五章九節（新共同訳『聖書』日本聖書協会）には「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子供と呼ばれる」として、隣人愛を教えている。

これに対してイスラームでは、「神を恐れる」という意味の「タクワー」の精神が隣人愛の思想と対比される。タクワーとは神に対する恐れを意味するが、自らを低くして絶対的な神に全身全霊で従うことを意味している。そういう意味では「タクワー」はキリスト教の「隣人愛」にも通じる教えである。

しかし世界史をみれば、究極の隣人愛を掲げるキリスト教も、思想的には現実の歴史社会から一線を画してきた仏教においても、まったく政治的社会的側面にかかわらないでくることはできなかった。霊肉の二元論の立場から精神世界を社会的世界より上位に据えたはずのキリスト教においても、事態はいっそう「政治的」である。西暦三一三年にキリスト教がローマ帝国の公式宗教として採用されてからは、歴史社会の中心として「教会」があらゆる過酷な営為に参加してきたということは、西洋史を紐解けばすぐに明らかになる。

三大世界宗教のひとつであるイスラームの教義では、現実社会の執着から逃れてひとり魂の救済を求めるような思想も、敵でさえも愛せよという、実現不可能な究極の愛の精神をも、教えられはしなかった。むしろ、現実社会のただ中において日常生活を営み、政治参加をすることにおいて、神を恐れ神に従うことが求められた。イスラームでは、信者が過酷な歴史社会と直面しながら生きることそのものが、宗教的な修行であり「ジハード」でもあった。この点で

はイスラームはユダヤ教と似ている。現在では、ユダヤ教徒がそのまま生物学的に「イスラエルびと」、つまりユダヤ人であるということとはできないものの、宗教学的にはユダヤ教は「民族宗教」のひとつとして分類される。倫理規定を含むさまざまな契約を結ぶ相手として、イスラエルの神によって選ばれたイスラエル民族が、約束の聖地イスラエルを求めて民族の興亡史に深くかかわることが宗教の根幹であるために、ユダヤ教もまた過酷な歴史社会と直面してきた。

そういう意味では、ユダヤ教の「イスラエル」に象徴される選民思想は、イスラームでは、あらゆる人間に要求される普遍的な選民思想に置き換えられる。神の唯一性とムハンマドの預言者性を認める人間は、国籍、人種、社会階層などを問われず、イスラームの「選民」を形成する。イスラームではこれを信者の共同体「ウンマ」<sup>1</sup>と呼ぶのである。

イスラームにおける魂の救済は「ウンマ」に所属することによって実現される。人間はウンマの成員となり、歴史社会をウンマと共に生き抜くことによって、来世で楽園に入ることができる。社会から脱出することによってでもなく、実現不可能な高度な理想に殉じることによってでもなく、現実社会のなかで神の指針に従って人間としての自然な生を生きることこそが、イスラームの教えの根幹なのである。

ユダヤ教の「イスラエル」、キリスト教の「教会」、イスラームの「ウンマ」は、いずれもそれぞれの信徒の意識が収斂していく宗教の中心点でもある。これらの中心点の役割こそが、宗教史の要点でもあり、将来へむけて平和を作り出す責任ある母体ともなる。したがって、これら母体が協働することができるなら、持続可能な平和な世界を維持していくための宗教の役目を果たすことができるかもしれない。

## 2、宗教と暴力

世界のどの宗教も、長い歴史のなかで、一切の暴力とかかわらな

いできたものはない。たとえ物理的な暴力を行使しなかったとしても、精神的、心理的な暴力にまで範囲を広げるなら、暴力批判から逃れられる宗教などない。しかし、宗教は本来、人々に平和を説き、さまざまな欲望の束縛からの解放方法を教え、与えられた命を穏やかに生きるように諭すものではなかったのか。仏教の「無」や「空」の教えも、キリスト教の「隣人愛」も、イスラームやユダヤ教の「戒律」も、苦しい現実の生を生きる人々に与えられる「魂の救済装置」ではなかったのか。選民思想を基盤とするモーセの十戒でも「人を殺してはならない」と記してある。

この「人」とはいったい誰を指すのだろうか。ユダヤ教では神に選ばれたイスラエルの民だけを指すのかもしれない。実際にユダヤ教の祈禱文には「神よ、イスラエルにだけ平和を与えたまえ」といった内容のものもある。イエスもユダヤ人として生まれユダヤ人として生きた人である。イエスのいう「人の命」はユダヤ人だけに、あるいはイエス後に発展した異邦人伝道を予期して「イエスを信じる人々」だけを意図しているのであろうか。そうであれば、宗教にはそれぞれの宗教の囲い込みが成立しており、その枠外にいる人は「人」として扱われないということになる。枠外にいる人々として、まず思い浮かぶのは異端や魔女、悪魔つきとして排除されてきた人々のことであり、他の宗教を報じる異教徒たちのことである。ひとつの宗教だけを絶対の真理として扱い、他の宗教思想を異教や邪教として退ける立場からみれば、「人」とは同じ宗教の信者でしかありえない。

「あなたの敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」という究極の愛の理想を教えたキリスト教は、まさに究極の平和を教える宗教であるが、前に触れたように、そのキリスト教が歩んできた歴史はけっして平和的とはいえない。土井健司は以下の様に言って、キリスト教とキリスト教徒を分けて考えるように勧めている。。

キリスト教とキリスト教を信じる者とは必ずしも一致しま

せん。キリスト教の中にはさまざまな考え方があるのです。しかし、いかなる理由からでも積極的に戦争、紛争、暴力を行うことはキリスト教的ではありません。(土井健司、『キリスト教を問いなおす』、筑摩書房、二〇〇三年、五六頁。

この考え方にはたしかに説得力があるが、しかし、キリスト教徒がいなければキリスト教は存在しないということを考えるなら、宗教的理想と信者の行為とは完全には切り離して議論することができないように思われる。

ある宗教が歴史のなかで生き残っていくためには、その宗教は社会と密接な関係をもっていなければならない。そういう意味では、宗教はいまでも社会の統合理念として潜在的な力を有しているのである。宗教と暴力の結びつきは、世界のどの宗教にもみられる現象である。しかし、「魂の救済装置」という役割を果たすはずの世界宗教が、歴史上、安易に暴力や戦争とかかわってきた理由として考えられることは、いかに精神主義を掲げる宗教であっても、宗教そのものが原理としてもっている「社会性」という性質が暴力や戦争に深くかかわっているからである。そのいっぽうで、この「社会性」を環境問題との関連で考えるなら、社会的・経済的理由が「魂の救済装置」という彼岸的な理想によって覆い隠されてしまう可能性が予測されよう。このような、宗教がもつ危険についても、あらかじめ考えておく必要がある。

キリスト教では、イエスやパウロの死後ほどなくして、徹底して非暴力を説き「あなたの敵を愛し、敵のために祈りなさい」とまで教えたイエス・キリストの説教は省みられなくなり、「神が望めば」神の名による戦争が正当化されるという「正戦思想」が浮上してきた。しかし、この思想はもともとユダヤ教から受け継いだ「聖戦思想」を展開したものであり、旧約聖書の思想でもあった。キリスト教もまた、イエスが命をかけて排除した伝統的な「イスラエル」の聖戦を再現させ、公式教理のなかに植えつけてしまったのである。

### 3、宗教的理想をもう一度

宗教的暴力や殺戮は、神の意志ではけっしてないという冷静な判断をする人々は、どの時代にもいたであろう。それらの「常識的な」人々が多数派であり、しかも豊かな知識と宗教的信念をもって、巨大な権力に非暴力の抵抗をすることができるなら、過激な聖戦思想も巨大な国家権力による国家テロをも排除する力になることができるかもしれない。これらの「常識的な」人々は、温暖化や資源枯渇などの地球環境問題についても、宗教的信念をもって立ち向かうことができるであろう。

ここで、地球環境問題という歴史的に緊急で重大な課題を前にして、わたしたちは宗教がもつ本来の役割をもう一度思い出してみることが必要である。「魂の救済装置」として出発した宗教は、どの宗教も非暴力を説いている。「あなたの敵を愛しなさい」というイエスの言葉は現実には実行不可能な理想であるが、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい（マタイ七章一二節）」という教えなら、誰でも実行することができよう。「敵を愛する」ではなく、こちらのほうを「黄金律」として尊重したのも人間にとって実行可能な自然な教えであったということができるかもしれない。

幾度かの繰り返しになるが、イエスの山上の垂訓は「あなたがたも聞いているとおり」という言い出しで旧約聖書の律法、つまりユダヤ教の戒律と対比しながら、あまりにも理想的で現実には実行が不可能な厳しい道德率を説いている。究極の隣人愛である「敵を愛しなさい」という教えとともに、イエスがなぜ、このような人間には実行不可能な教えを述べたのであろうか。

繰り返しになるが、八木誠一によると、「神の支配」のもとでは、人間の行為は定められた律法によって決定されるのではなく、「神の支配」によって決定されるのであり、人間の側の意図的な判断を超えていることになるという。

キリスト教にみられる「隣人愛」や「黄金律」の教え、ユダヤ教やイスラームの日常生活上の道徳、ユダヤ教の「十戒」、イスラームの「タクワー」の精神などの意義をもう一度、その根源に立ち返って考えることが必要なのではないだろうか。

翻って現実をみつめてみれば、二〇世紀の後半から各地で台頭してきた宗教復興運動の隆盛は、近代政治体制を導いた政教分離政策がますます形骸化していることを示しているようにみえる。そこでは、政教分離政策は現代政治にとって最善策であったのかという疑問が湧いてくる。現実には宗教思想の影響を完全に排除した政権など、世界のどこにもないからである。

前近代のヨーロッパのように、政治権力に教会権力、あるいは宗教的権力が結託することは、避けなければならない。そういう古典的な意味での政教一致には、もはや意味がないであろう。しかしそのいっぽうで、いまや宗教本来の精神や理想を政治や社会に応用するという、新しい発想の宗教観を考えるとときにきているのではないかと思われる。

たとえばモーセの十戒に従って紛争による殺戮を回避し、イエスの「隣人愛」の精神に従って国際政治や地球環境を考え、あるいはイスラームの「タクワー」の精神にたちかえって謙虚に平和構築を進め、将来の人類の平和的な生存を考えるなら、宗教の理想がサステナブルな地球環境を維持していくための重要な役割を果たすことができるであろう。このような考えについては、複雑な国際政治や環境問題を考えるうえで、宗教的理想などなんの意味もない、むしろ子供だましにしかすぎないという反論が返ってくるであろう。

しかし、インドの独立の父、マハトマ・ガンジーやアメリカの M. L. キング 牧師の「非暴力的抵抗運動」が現代の私たちにも感動と勇気をあたえ続けている現実を考えるなら、「宗教的理想」にも国際政治や経済を動かすだけの力があることを認めざるをえないであろう。

こんにちの宗教的暴力は、たんに宗教的要因だけで起きているのではないが、その背後には、相互の無理解が横たわっていることも

憂慮すべき点である。宗教と平和を考えるために必要なことは、たとえ意味がないなどと誹謗中傷をされようとも、宗教間・文明間対話を実行し続けることである。元ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の活動や、前イラン大統領ハータミーによる「二〇〇一年国際対話年」の提唱などのように、国際政治や環境問題においても多宗教間でたがいに理解しあい協働することが、いまほど求められているときはない。

興味深いことに、世界各地で気候危機に見舞われている人類にとって、一つの指標となる見解が「気候危機と人類の今後」という対談形式で、新年1月8日の「朝日新聞朝刊」に掲載されている。経済社会理論家のジェレミー・リフキンと経済思想家の斎藤幸平との対談で、私と同意見だったのは、リフキンの以下の見解である。リフキンは斎藤に「レジリエンスの時代」について尋ねられると、以下のように答えた。

（レジリエンスは）回復だけでなく、自然に適応し、共存する能力が私の考えるレジリエンスで、今後の人類に必要な力です。人間は自然環境を支配するのをやめ、自然のほうに適応しない限り、存続は危うい。それが「レジリエンスの時代」なのです。

リフキンの主張は、持続可能な平和な世界と自然環境を地球上の子孫たちに残すために、人間は自然環境を支配するのをやめ、自然の在り方に従わない限り、存続は危ういということであろう。以前から私が考えてきたことを、はっきりと言っているのに驚いた。この対談によると、これまでの人間の経済活動、すなわち資本主義が地球環境を激変させたと判断し、新たな地質年代を「人新世」と名づける提案が国際学会で検討されているそうである。

私は数年前から、国際政治や環境問題の解決にあたっては、自然を尊重することと同時に、歴史を生き延びてきた宗教が背負う役割



と責任を重要視することであると主張してきた。実際、宗教の役割は、ますます大きくなっているが、日陰の宗教学者の声など、これまで世間に響くことはなかったが、世界には似たような見解を持っている高名な学者もいるのだと、元気づけられた。

今日では、科学万能の時代に暮らす私たち人間も、人智を超えた神・仏の教えに、謙虚に耳を傾けることが大切かもしれない。とくに同一の神を奉じる三つの宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは、「アブラハムの宗教」という共通性を掲げて、暴力を放棄し平和を作り出すために協働することが、いま、このときにあって、緊急の課題である。たがいに正統性を主張していがみあって地球環境を破壊し、命の差異をことさらに強調して他者を排除するような時間は、わたしたち人類には、もはや残されてはいないのである。

それだけではなく、地上の人類の幸福でさえ、十分には確保できない人々が、宇宙へ打って出ようとするなど、不遜なことではないかと思う。地上の問題が満足に解決できないままで、月や衛星を、人類の「ゴミ捨て場」として汚そうとするなど、誠に不遜なことではないか。今日の気候不順は、まさに恐竜やマンモスが跋扈していた時代を彷彿とさせる。何億年も前のことなので、現代の私たちが心配する必要はないと思うが、気候は人間の心身に大きな影響を与える。もしかしたら、ウクライナやパレスチナの紛争も地球の気候変動が人類の深層心理に悪い影響を与えているのかもしれないと思わずにはいられない。

---

本文は隔月刊雑誌『みるとす』No.92 2024 に掲載された拙文の転送である。昨年10月に勃発したイスラエルとガザの戦争が一時も早く終息することを祈って、平和への祈りとして書いたものである。この戦争に関する具体的な枠組みについては、アラブ調査室の2024年1月号ホームページに投稿した論文『三つの一神教における宗教と紛争』「第8回、ガザ戦争の終結を祈る」に続くものである。紛争はいまだ止まず、ガザ側には幼児を中心に3万人を超える犠牲者が出ている。(2024.3.15)